

発表者氏名： 大内 比呂子

所属学校： 高等学校

派遣職種： 家政教育

派遣国： ソロモン諸島

派遣先： ベティバツ中高校

タイトル：
ソロモン諸島での協力隊活動を通じて広がった世界

キーワード： つながり・広がり

発表要旨：

大学時代からの夢であった協力隊の参加を実現した。協力隊への参加を希望したきっかけは、大学時代、さまざまな外国人にお世話になって親切にしてもらったことであり、いつかどこかで恩返しをしたいと考えていた。派遣されたのは南太平洋にある小さな島国、ソロモン諸島。ソロモン諸島は南太平洋のアフリカ、といわれ、南太平洋の中ではまだまだ発展途上にある国である。首都でさえ、インフラ整備はいきとどいておらず、撒きごはんを炊いている家をよく見かけた。任地は、首都からさらに離れた山の中、まさにジャングル。ガスも水道も電気もない。派遣先は学校であったが、学校とは名ばかりの小屋があるだけ。トイレすらなかった。生活に慣れるまでは体力を消耗し、大変な時期もあったが2年間という限られた時間は無駄にはできないという一身で活動に取り組んでいた。

現地では学校で生徒に家庭科を教え、教員や学校近隣の村に住む女性に技術指導を行った。自分が帰国したあとも現地の人が自分たちの力で生産活動が行えるだけの技術の伝達と最低限の施設の整備をした。のんびりした時間の中で過ごす現地の人のリズムと自分の限られた中で過ごしているリズムがかみ合わなくて、悩んだり歯がゆい思いをすることもあったが、それでもその中でできることは思い残すことのないくらい、全てやりつくした。

帰国してからは、私は元の職場に戻り、仕事を再開している。後任が同じ派遣先で活動してくれているので、その方と連携してソロモン諸島の学校と滋賀県の高校とで学校間交流を行っている。交流の方法は主に文通である。狭い世界で暮らすソロモンの学生にとっても、情報にあふれる社会の中で暮らす日本の学生にとってもお互いの世界を広げるいい機会となっている。2年前とは違った気持ちで、違った自分で教壇に立つことができている。経験したものにしか伝えることのできない話を生徒にすることができるようになった。現地で鍛えられた精神力は日本の社会でも役立っている。協力隊に参加して本当に良かったと思う。そして、退職したら今度はシニアでまた参加したいと夢みている。

